四国地方における大学間連携によるプレFDの可能性

上月翔太（愛媛大学）、飯尾健（徳島大学）、俣野秀典（高知大学）、小坂有資（香川大学）、蝶慎一（香川大学）、村田晋也（愛媛大学）、吉田博（徳島大学）、仲道雅輝（愛媛大学）

1．プレFDの現状

（1）設置基準におけるプレFD

大学院設置基準（2019年改正）
（学識を教授するために必要な能力を培うための機会等）
第四十二条　大学院は、博士課程（前期及び後期の課程に区分する博士課程における前期の課程を除く。）の学生が修了後自らが有する学識を教授するために必要な能力を培うための機会を設けること又は当該機会に関する情報の提供を行うことに努めるものとする。

（2）現行のプレFDプログラムの類型

対象	期間	単位認定
全ての正規大学院生 ・Mについては2年次に限定する場合も ・一部研究科に対象を限定する場合も ポストドクター、科目等履修生	多くが集中日程での開講 一部半期での開講も	・大学院共通科目の枠組みで単位認定するのがほとんど ・多くが2単位（1単位もみられる）

今野（2016）をもとに作成

本発表の目的
四国地方の大学においてプレＦＤを実施する際にどのような展開の可能性があるべきか、都市圏の大規模研究大学を中心に行われてきた従来型のプレＦＤに対し特色を出していくべきかを検討する。

2．地方大学とプレFD

（1）過去の実践

一部地方大学で先駆的にプレFDが試みられるなど意義は認識されていた（林　2012）→ 大学院生対象ワークショップなどとして行われているものもあるが、十分に展開をみなかった

（2）地方大学におけるプレFDの困難

大学院の構成と修了者のキャリア傾向
理工系に偏重した大学院生の比率：理工系は研究中心でプレFDのための時間や労力の捻出が困難
修了後のキャリア：多くが企業等への就職で、大学教員志望者は必ずしも多くない

実施者の確保
指導者の不在：先行事例のほとんどがFDを担当する部署が実施者。地方大学は継続的にプレFDまで実施できる人的資源に乏しい。

（3）地方大学におけるプレFDの必要性

指導補助者の育成
「大学設置基準」2022.10改正によって、指導補助者という位置づけで授業を担う人材を配置できることになった。指導補助者の育成の一環にプレFDが位置づけられる可能性。

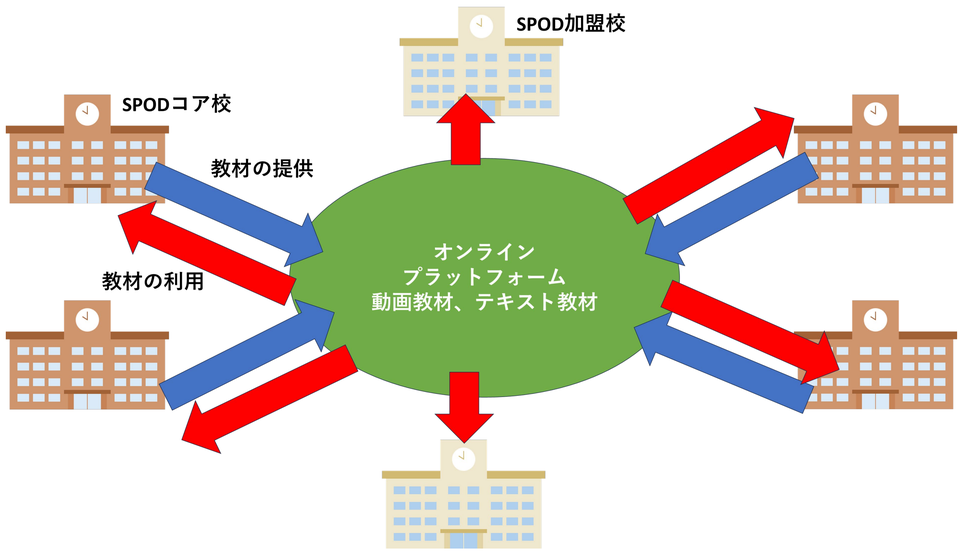
博士人材の育成
多様なキャリアを見据えた博士人材の育成は、博士課程をもつ全ての大学にとって対応すべき課題になる。その中で専門性を高める以外の汎用的能力の育成も求められる。

（4）地方大学におけるプレFDの近年の動向

第4期中期目標における項目化：山形大、愛媛大
プレFDの情報提供：山口大
博士課程学生支援のプログラム提供：山梨大
オンラインプログラムの開発：熊本大

**地方大学に適した
プレFDモデルの構築が必要**

3．四国地方大学間連携によるプレFDの構想



SPODコア校
・動画、テキスト教材の作成と共有
・各大学の事情に応じた共有教材の利用
・各研究科への教材に関する情報発信
・近隣大学大学院生も参加可能なワークショップの開催

SPOD加盟校
・各研究科への教材に関する情報発信
・各大学の事情に応じた共有教材の利用
・コア校を中心に実施される各種研修への参加斡旋

本構想を支える取り組み
・各大学における新任教員研修のプログラム
・SPOD-FD専門部会における各種ワーキング
　→FDマップ（コンテンツの確定）、オンラインFDプログラム（プラットフォーム構築）、TA・SA活用（指導補助者）
・先行するプレFDプログラムの実践
・先行するTF（上級TA）制度の実践

修了と修了者へのフォロー
SPODとしての修了証明の発行、修了者アルムナイ組織の結成、非常勤講師や指導補助者の紹介等、継続的支援 etc.

4．四国地方大学間連携によるプレFDで何を学習するか

**大学教育における実践を主として想定しながらも、
多様なキャリアに対応できる内容を目指す**

（1）基本的な教授法

授業設計：コース設計、クラス設計、学習目標の設定方法、学習目標達成に向けたスコープとシーケンスの設定
授業方法：講義法とアクティブラーニング、多様な技法、わかりやすい説明、伝わりやすい話し方
学習評価：評価の原理、望ましい評価の条件、評価の方法と工夫
シラバスと授業計画書の作成：学習内容を踏まえた作成
模擬授業の実践：学習内容を踏まえたマイクロ・ティーチングの実践
個別指導：研究室などでの後輩指導、コーチング

（2）高等教育の現状

高等教育の特徴：高等教育の歴史、日本の大学の特徴、各専門分野の特徴
組織的な教育：大学のカリキュラム、政策の動向
現代の学生：多様な学生の存在、合理的配慮、さまざまな組織的支援

（3）専門家としてのキャリア形成

大学教員という職業の特徴：4つの学識、研究と教育の関係、学生からは直接見えないさまざまな仕事
高度職業人としてのキャリア：専門性を活かしたキャリア形成、専門性と社会の関係、アウトリーチ
省察的実践家：専門家としての学習を継続するための省察の方法
専門分野の社会的意義：自分の専門性の社会における位置づけやその意義の確認

（4）トランスファラブルスキル関連

いわゆる汎用的な能力：ex.)「愛大トランスファラブルスキル」：「リーダーシップ」「コミュニケーション」「問題解決」「キャリア形成」「倫理」
協働の方法や態度：他の専門分野の学識に対する敬意、自身の専門性の相対化、複雑な課題に他者とともに取り組むための態度

5．四国地方大学間連携によるプレFDの意義

（1）参加学生にとっての意義

教える能力の向上：大学だけでなくさまざまな職場においても応用できる、TA等既に行っている教育活動においてもすぐに応用が期待できる
キャリア形成：大学教員の仕事に対する具体的なイメージをもてる、さまざまなキャリアの選択肢をもてる、自身の専門分野やその意義を多様な相手にわかりやすく伝えることができる
大学の多様性の学習：自大学だけでは限界のある高等教育機関のさまざまな現状を学ぶことができる
他の大学院生との交流：他の研究科だけでなく、他大学の大学院生との交流の機会の創出も期待できる
専門分野の学習への影響：他分野のに触れることで自身の専門分野の学習（研究）に資する知見が得られる

（2）連携大学にとっての意義

大学院設置基準の努力義務：プレFDに関する情報発信となる、プログラムの開発や提供に関与することで情報発信以上の関与ともなり得る
各業務の均衡のとれた大学教員の養成：教育、研究、社会貢献などをバランスよく実施できる教員の育成につながる
大学院生キャリア形成支援の充実：政策的にも要請されている博士課程人材の育成の一環となる
教育の質向上：育成した大学院生がTAなどに入ることでより高い質の教育を提供できる、加えて教員の授業負担を軽減することも期待される
プレFD実施の効率化：人員などの制約のもと、連携大学が高い質のプログラム提供が可能になる、各大学の事情に応じたカスタマイズも可能となる

（3）四国地方大学にとっての意義

教える力をもった専門人材供給：各専門分野について適切に教育が実施できる人材を大学以外にも供給できる
高等教育開発者の育成：プレFDの学習者は大学教育全体に関心をもっていることも多く地方では不足しがちなFDの担い手を育成することにもなる
大学院設置基準の努力義務：自大学の大学院生に情報提供を行うことで努力義務を満たすことができる
非常勤講師や指導補助者の供給：育成された大学院生（あるいはポストドクター）を授業担当者として雇用することができる

6．四国地方大学間連携によるプレFDの実現に向けて

（1）SPOD-FD専門部会プレFDワーキングの活動

先進事例の調査：京都大学（2月7日・8日）大阪大学（2月16日・17日）
関連テーマのシンポジウム参加：東京工業大学（1月26日）

（2）指導補助者制度の検討と運用

指導補助者の位置づけをどうするか：授業担当者以外の教員、TA／RA／TF、職員の授業担当（実際には行われているケースもある）
指導補助者のための研修とプレFDをいかに関係させるか：指導補助者になるための集中的な研修を実施する、プレFD授業の単位修得を条件化する（多くのTF制度の先行事例では単位修得を条件としていることが多い）

（3）プレFDプログラムの試行「教授法入門」研修

実施時期：2023年9月1日～9月28日
愛媛大学での研修実施：将来的な授業科目化を目指した試行版、ポストドクターや研究員も受講可能。ＳＰＯＤ加盟校の大学院生にも開放。
実施形態：対面研修とオンデマンド教材による学習
研修内容：「大学教育や人材育成を取り巻く社会的文脈」「コース設計の基本、クラス設計の基本」「学習評価の基本、学習評価の実践例」「講義法とは、伝わる話し方」「アクティブラーニングとは、アクティブラーニングの実践例」「シラバスのピアレビュー」「教育の倫理をめぐるディスカッション」「10分のマイクロティーチング」
プログラム評価：参加者へのアンケートとインタビューの実施、来年度以降の追跡調査の実施

お問い合わせ
上月翔太（愛媛大学教育・学生支援機構）kozuki.shota.vc@ehime-u.ac.jp

参考文献
今野文子（2016）「大学院生を対象とした大学教員養成プログラム（プレFD）の動向と東北大学における取組み」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』2巻、61-74.
林透（2012）「組織をつなぐFD＆SDであるために」『CGEIアニュアルレポート2011』、3-7.